

人文会ニュース

1987. 10

図書館はこんなもの?.....小川俊彦 1

人文書講座XIII

老いと現代.....今村仁司 8

書店がなくなる?.....井門照雄 19

有隣堂書店・人文会合同三二研修会報告

勁草書房 富岡 勝 22

筑摩書房 間宮幹彦

「本屋さん」の本を誰が買ったか.....村上信明 28

49

業務用

東京大学出版会

新しい世界史 全12巻 第7回配本 ●内容見本呈
⑦草の根のフアシズム 吉見義明
 日本民衆の戦争体験 蘆溝橋事件五十周年の夏。アジアと太平洋を血に染め完敗したあの戦争のことを、大陸で南の島で戦い倒れた数多の民衆が、万感の想いで語る。 四六判・一八〇〇円

子どもの自分くずしと自分づくり
 竹内常一 いじめ、登校拒否、非行を適応過剰な自分くずしと捉え、友の中での人格の再統合を説く。UPP選書・二二〇〇円

バイオテクノロジーと社会
 東京大学公開講座45 社会に大きなインパクトを与えつつあるバイオテクノロジー。両者の関係を多角的に解説。一八〇〇円

〒113 東京都文京区本郷 電話 811-8814

日本を育てた技と力が見える

ビジュアル版 日本の技術100年

全7巻 ■全巻監修／向坊 隆
 隅谷三喜男／伊木正二

日本の近代化を支えた工業化と技術革新のダイナミズムを内側から照らし、歴史のなかへ位置づけた初の技術史！

【第1・2回好評発売中】 各5800円

4 航空機 自動車 5 通信 放送

◆A4変型判・上製カバー装・函入・平均208頁・図版総数3000点◆学校、公立図書館に必要な5・6分類の新シリーズ◆詳細内容見本呈

東京神田 **筑摩書房** 小川町2-8

日本軍事史

(上・下)

藤原 彰／著

上巻 定価2500円

下巻 予価2500円('87年10月刊)

戦前篇は明治維新から軍事国家として歩みつけ破局までの80年間、戦後篇は平和国家を国是としたにもかかわらず自衛隊創設から核戦略体制に組込まれつつある今日までの状況を政治史とのかかわりて明らかにした通史



日本評論社

〒170 東京都豊島区南大塚 3-10-10/ ☎03-987-8611 代

宗教から哲学へ
 ヨーロッパ的思想の起源の研究
 F・M・コンフォード著 廣川洋一訳 哲学・科学
 および体系的思想の宗教的根源を跡づけ、西欧思想の原型と西欧的思想の起源を明らかにする。本書は一九六六年に翻訳出版されたヨーロッパ古典学の名著の再刊新訳版である。
 定価3800円

経済学説と精神史の間
 プラトンからミルへ
 内田忠寿著
 定価4800円

東海大学出版会

〒160 東京都新宿区新宿3-27-4 ☎(03)356-1541

図書館はこんなもの？

日本図書館協会

小川 俊彦

●図書館は誰のものか

ひとところに比べたら少なくなってきたとはいえ、図書館は夏休み最後の追い込みで行列といった夏の風物？記事はあとを絶たない。

夏休み、宿題・受験、暑さに負けずにがんばる様子、

三題咄のような発想で図書館を取りあげるわけである。記者自身もそういう経験をしてきたことでもあるのだから、図書館とはそういうもので、本や雑誌やレコードなどを利用できることは附録でいど、と考えている人が多いせいでもあらう。

図書や雑誌などの利用が中心の、本来的な図書館を作ろうとすると、外部、とくに議会やPTAなどから、必ずといってよいほど、学習席がないとか、足りない、といったクレームがでてくる。住環境が悪いので、せめて冷暖房のととのった静かな図書館で、子どもたちを勉強させたい、というのがその理由である。この理由は日本全国どこでも同じである。暑い地域でも、冷房に関係ない涼しいところでも、どうみても住環境に問題のあるうちはがない、というところでも、学習室を作らせないと気がすまない人々がいる。

いま図書館は、人の集まりやすい、できるだけ気軽に使えるところに作ろうと考えられてきている。すべての市民、つまり幼児でもお年寄でも、誰もが気がねなしに図書館で本を読んだり、レコードを聴いたり、借りたりすることができるようにと、人々の多く集まりやすいところに建てようとしているわけである。

県立図書館のように・本格的な保存や調査・研究のための資料や機能を持っているところはともかく、日常生活の中での調べもの、楽しみや喜びを見いだすための図書館は、郊外よりも、多少狭くても街中にあることが望

ましいのはいうまでもない。そんな狭い中に、一日一人だけの利用で占領されてしまう机を沢山いれることは、どう考えても経済的でないし、受験生以外の普通の利用者を圧迫することは目にみえているのに、わが子可愛い受験生を持つ親は、圧力をかけてくる。大学に入ってしまったら、親も子も図書館のことなど見向きもしなくなってしまうのに、である。

図書館できちんと勉強している子もいるが、図書館を理由に好きかってなことをしている学生も多い。学習席を要求する親ほど、子どもが図書館に行くということだけで安心しきっているわけであるが、デイトやおしゃべりの場所に使っていることまではご存知ないようである。能率上からいえば、自宅で勉強しているほうがどれほど良いかわからない、というのが図書館員の実感である。

この学習室が広がり、図書などのスペースが減ることは、本が置けないから図書費がふえない、従って新しい本がないとか、音に対して敏感になるため、勉強のじゃまを理由に子どもやお年寄はどうしてもじゃまものあつかいされてしまうとか、音にうるさいくせに自分たちは勝手にふるまうため、図書館員はその管理に追われる、

と弊害ばかりである。

こんなことを書くと、じゃ受験生はどうしたら良いのか、といった反論があるに違いないが、彼らは学校図書館の存在を無視しているのである。ほとんどの学生は公共図書館で本を利用することはない。まわりの人が勉強しているから自分も勉強できるに違いない、と考えて図書館にやってきているにすぎない。

学校図書館に冷房がなかったら要求すればいいはずである。本を借りることがないとしたら先生方が交代で図書館につめても、夏休み中一人が一回出勤したらそれで済むことである。それよりも、もしそういう要求がきちんと学校当局、行政当局に向けられていたら、学校図書館に司書が不在、といった、何のために図書館を設置しているのかわからないような状態も、少しは改善されるに違いない。

皆が甘えていて、そのことが公共図書館も学校図書館をもゆがめ、結果としてどれもが中途ハンプなサービスしかないことで終わっている。何故図書館を作るのか、何故作る必要があるのか、誰のために作るのか、そこではどんなサービスが行われるべきなのか、マスコミも含

め、一人一人の市民が図書館をきちんと理解しないと、図書館はいつまでたっても無料の学習室でしかない、といえよう。

●生涯学習と図書館

生涯学習という言葉がもてはやされ、誰でもが何かを学ばないと日本人でなくなってしまうかねないほど強調されている。しかし、学ぶ方法や手段となると、公民館でカルチャーセンター的なことを、しかもお互いに助けあって、できるだけ安くあげること程度にしか考えられない。

普通の市民が、学びたいというより具体的な行動としては、放送大学があげられようが、テレビで学んだことを更に深めるとか、レポート提出のために、ということとで資料を調べようとした時、その人が使えるのは公共図書館しかない。一部の大学では一般市民にも開放している図書館があるが、全国的にみればそれは稀な例で、大部分の人は公共図書館に依存しているはずである。

しかし、こういうことが予測されているにもかかわらず、放送大学を作った人達はもちろん、そういう学ぶ市

民が大勢いるだろうと予測している自治体側でも、具体的な対応策は何もない。図書館が何とかしているだろう、とか、それぞれで工夫しているだろう、程度にしか考えられていないのである。

カルチャーセンターとなる建物には国も補助を出し、自治体もできるだけ立派なものを作ろうとする。また、そこでの講座はたまに金をかけて派手にやるか、逆に元専門家を呼んでお茶をにごすか、どちらかであり、市民が時間をかけて知りたいこと、学びたいことを保障する、というよりも、与えたいものを与える、ということに終ってしまっている。

生涯学習ということを最も実践しているはずの、放送大学で学んでいる人達に対して何ら資料や情報提供の機会を与えず、それほど希望していないにもかかわらず、カルチャー、つまり文化と称して施設と講座を提供する。まさに形だけの文化である。

放送大学を例に出すまでもなく、学ぶ、ということは義務教育を除いては、本来個々の人間が自分自身をたかめたり、趣味などを深めていくことにあるはずである。公民館やカルチャーセンターでの、与えられるだけのもの

でなく、自ら深めるためのものである。そして、そのことを最も可能にしているのが図書館である。

臨教審で生涯学習といっている視点からは、図書館の存在がほとんど感じられない。与える教育しか考えていないからであろう。しかし、アメリカやイギリスなど図書館先進国の市民は、学校教育以外に学ぶところといえは図書館である。生活の情報から大学レベルの勉強まで、すべて図書館で解決している。

●アメリカの図書館

アメリカでは、かなりの公共図書館で大学教育を受けることが可能である。図書館は近くの大学と協力し、単位取得できるコースを開設している。大学に行きたくても行けなかった人達は、このコースによって大学卒業資格を得たり、更に勉強を続けるために、本物の大学に行ったりする。もちろん資格だけでなく、ただ自分の教養のために学ぶことでもかまわないし、それまで学校教育をきちんと修了してこなかった人々にも門戸は開かれている。登録した人は、図書館が開いている時間であれば、いつでも利用することができる。

また、図書館は求職者のためにもさまざまなサービスをしている。求職に役に立つ図書や雑誌、パンフレットを置くことはもちろん、求人情報も職業安定所などからも入手し、掲示しているし、職業訓練の機関の紹介や、コンピュータを用いての職業適性を知る手がかりをも与えたりしている。図書館でやらないのは直接の仕事の斡旋だけで、それ以外の転職や求職のすべての情報が図書館から得られる。分館によっては、これら求職者で閲覧席がいっぱいなんてこともあるほどである。

「ブルックリン公共図書館では、毎週二時間、個人教師と生徒のペアが三〇組以上、芸術・音楽・ウィングの室の大きなテーブルを陣どり、フラッシュ・カード、ワークブック、黄色のレポート用紙を広げて、時間の読み方、求職願書の書き方、スーパーマーケットの商品ラベルの読み方など、生徒の必要に応じた授業が開始されています。

マサチューセッツ州サウスブリッジのジャコブ・エドワーズ記念図書館では、外国生れの成人のために、英語の話し方・読み方・書き方を教える個人教師が約四〇人、働いています。——中略——

ところで、なぜ図書館は、読み書き教育の責任をもつ必要があるのでしょうか。図書館には、確かにスペースと資料が揃っています。しかし、何よりもアメリカ図書館協会事務局長のロバート・ウェッジワース氏が説明するように、「人々が新聞の求人欄を見るために図書館にやってきても、そこに書いてある事柄をほとんど理解できない——そういう時にこそ、図書館員が手を差しのべて、他の教育機関がなし得なかった部分を援助できる」からなのです。しかも図書館の学問的でしかしいかめしくない雰囲気、成人の不安な気持ちを和らげるのによくに役立っています。また読むことができない成人にとつて、「自」の生活圏外にあった図書館に出かける」というごく簡単な行為が、その人の心理的成長を真に助けることになるのです。」「『だれのための図書館』ホイットニー・ノース・シーモアJr等著 日本図書館協会刊）

失業者が多く、海外からの移住者が多いアメリカとはいえ、国も州も各自自治体も、そしてもちろん住民も図書館の存在を、そしてその重要な役割を理解していることを、この文章からおわかりいただけるであらう。

イギリスもちろん、図書館で同じような機能を持つ

て住民にサービスしている。教育費や、日本という教養費、つまり本代にお金を使うことのないイギリスからのレポートがかってあった。学校教育は無料、必要な本は図書館が貸してくれる。本代が何で必要なのかえって不思議に思われた、というようなレポートであった。ある意味ではアメリカ以上に図書館が人々の生活の中に入りこんでいる国といえよう。

●貧弱な図書館行政

教育、しかも生涯にわたっての教育を論じながら、臨教審では図書館のことがほとんどふれられていない。議論したのは、いわばわが国の一流の文化人のはずである。文部省には図書館課はおろか図書館係すらない。もちろん専門の担当官もない。議会で図書館のことが取りあげられるのは、国でも地方自治体でも、年に一回あるかなしきである。

「良い図書館は、教育と教養を身につけた人にとって、学校組織と同様に必要不可欠なものである。図書館は、われわれの文化遺産の管理人であるばかりでなく、知識の進歩と発展の鍵でもある」といったのはケネディ大統領

領であり、その言葉を用いて大統領選挙にあたって、図書館に関する長文の声明文を出したのはジミー・カーター大統領である。

違いといってしまうばそれまでだが、図書館がある国と全くない国の違いがあると思えるほど、その理解において差が大きい。図書館の建築に際し、文部省は補助金を出しているが、その額は総工費の七分の一か八分の一程度である。日本の図書館数は約千七百館、市では12%、町村では83%に図書館がない。歩いていける距離に図書館を、ということになると一自治体に一図書館ではとても足りないことはいうまでもないが、そのたった一つの図書館さえ持たない自治体が多いのである。

建ててほしいとお願いすると、金がないという。体育館や、何を入れるかそんなにあると思えないのに郷土館や美術館ができたり、満員になるのは年に一〜二回しか考えられないホールは建つ。図書館というものの中身がわからないことと、派手さがないから敬遠しているのしか考えられない

国が出す補助金も年々減り続けている。昭和五十七年に約二十二億であったものが、昭和六十三年度の要求額

は十一億強と半減である。行革で財政を引きしめていることがあるにしても、こんなことが許されていいことなのだろうか。国を守ることが大事だ、と一方では少しずつ、額ではかなり大幅に予算がふえているのに、そして戦闘機一機が二十億とも五十億ともいうこともいわれているのに、ケネディが学校と同じ程度に必要とした教育機関に対し、こんな無関心、冷淡でいいものだろうか。

教育とはかけ声だけのものではないはずであるし、投資したものが効果を発揮するまでに長い時間を要するものである。国も地方自治体もできるだけ教育を個人の負担とか、精神力にまかせようとしているのではないだろうか。

予算をけずり、人手をけずる。その一方で市民のサイフやボランティアをあてにする。安くあげようとするから、空いた公民館や教室を図書館にしようしたり、専門職である司書を採用するのは大変だからと、元教員とか、時間に余裕のできた主婦に仕事をまかせたりする。

アメリカの例に見られるように、きちんとしたサービスをしようとするれば、とても片手間でとか、経験だけで

やれる仕事ではない。ボランティアとか、アルバイトを含めての委託といったことが図書館で許されるとしたら、それは彼（女）のもっている能力を図書館サービスの一部に役立てることであって、ボランティアやアルバイトの人達が図書館のすべての業務をやることを意味してはいない。

高齢者再雇用という名目があって、教員は教育委員会に属するからと、同じ教育委員会の組織である図書館に大量の元教員が配属された例がある。教育なら何でも同じであるといった発想と、人手とは要するに頭数といった発想がある限り、図書館はアメリカやイギリスのレベルに届くことはありえない。

数の上では追いつく日がいつかはあろうが、それまでに発想が変えられるかどうか。図書館ができることは金がかかる。本が、レコードがビデオが売れなくなる。単純な発想だけで図書館づくりをばばんでいたのでは、ものを考える人間をふやすことも、本物の文化を残すこともできなくなる、と考えているのは図書館員のひがみのせいだろうか。

老いと現代

今村仁司

久しい間、老いの問題はそれほど重要だとはみなされてこなかった。それも当然で、近現代の社会システムにとって「老い」などはとるに足りないもの、人間が生物学的であるかぎり当然体験すべき蛇足のごときものであった。とりわけ、一九世紀に西欧で資本主義が確立し、同時に世界的規模で資本主義化が進展し、二〇世紀に入って地球全体が世界資本主義の網の目にとらえられていく過程では、生産力の向上、技術革新、国際的規模での分業体系の深化、商品輸出や資本輸出のための市場争奪戦と帝国主義戦争の勃発、第二次大戦以降ではとくに西欧資本主義国間の貿易競争や商品開発競争の激化、といった現象が次から次へと展開し、この過程にまき込まれる個々人の日常生活は多忙をきわめるだけでなく、人生の

浮沈も激しい。個人の人生は、経済という戦場で闘う戦士の人生のごときものであって、こういう個人に要求される資質は身体頑健、決断力、つねに生き生きしていることであり、つまるところ、「若さ」である。経済戦争は老人ではやりぬけない。戦士は、つねに青年であり、せいぜい年をくつてもかぎりなく青年的な壮年者でなくてはならない。経済戦争に耐えることのできないものは、たとえ若者であっても、「老人」であり、本物の老人がこの戦いで勝ちぬける見込みははじめから閉ざされている。近代や現代の経済生活では、老人であることはつねにマイナスの価値であり、「老い」の価値ははじめから極小値をとる。

偏見をはなれていえば、幼年、青年、壮年、老年といっ

たライフ・サイクルの各時期の間に価値の上下はない。本来は、それぞれの人生局面にはそれ固有の意義があるはずであり、子供と老人は社会のクズで、青年や壮年が社会の大黒柱だということはありえない。純粹に肉体的にみれば、若い者が強いのはあたり前だ。しかし肉体的に強いことと価値的に高いことは、ストリートには結びつかない。にもかかわらず、近現代社会では、肉体的強さⅡ若さと価値的プラス性とがストリートに結びついてしまった。それは個人の先人見とか、物の考え方の輕薄さといったものではない。近代市民社会とそれをドライブする資本主義市場経済が生み出したイデオロギーこそ、「若い」の価値低下をひきおこしてきたし、今もそうである。

近代社会の根本的思想は、合理性といわれる。本来の合理性は、どんなライフ・サイクルに生きようとそれぞれの局面での人間個人の人生を充実させることに役立つことであつたろう。子供であれ、老人であれ、女性であれ、はたまた身体に欠陥をもつものであれ、彼らの個体的生を保存することこそ、理性的Ⅱ合理的であることの目的であり、そのためにこそ理性は陶冶され形成されね

ばならなかったはずである。ところが、近代の「合理性」はいつのまにか、「合理性」の一部分である「効率性」に変質しはじめる。効率とは最小の費用で最大の効果をあげることだ。つまりそれは経済的（節約的）ということだ。だから経済合理性と効率性とは同一である。それは単なるケチではなく、効率的に節約することである。時間も経済合理的に使わねばならない。時間は希少財だ。人びとは、経済合理的に生きるべきだとするならば、効率よく、能率よく時間を使い、時間をムダにしないようにつとめなくてはならない。近代市民生活は「多忙」（ビジー）であることこそ、積極的価値をもつのである。「多忙であること」とはビジネスである。毎日が忙しく、めまぐるしく働きまわることが、ビジネスであり、その具体化が「商売・義務・事務・事件・企業」（これがビジネスの多元的意味だ）となる。かつて、近代以前の諸社会においては、未開であれ、古代であれ、初期中世であれ、世界中どこでも、「忙しくないこと」「暇があること」がプラス価値であり、「忙しいことⅡビジネス」は「悪」であつた。ゆったりと時間をムダに使うことは、あたかも老人のように人生をのんびりおくることである

が、近代ではこれが最悪の価値に転落してしまったのだ。近代の市民生活の指導原理たる経済合理性が「ヒマ」を追放し、「多忙」を前景におしだし、人類史的価値転換をひき起こしたのである。

この価値転換は、高々、二、三〇〇年前に起きたことである。多忙が「善」となること、またそれが社会を動かす原理となることは、必ずしも円滑に進展したわけではなく、宗教戦争、宗教改革、社会構造の大変動、政治的・社会的革命などを経てはじめて可能になったのだが、それだけに近代人は、「多忙」と「効率的合理性」をこよなく大切なものと感じるのかもしれない。また事実、この価値基準で人生を領導しないでは、人生の落伍者にもなってしまう。この近代の動向は逆戻りできないのかもしれない。だからといって、この根本動向がつくりだすマイナス効果を放っておいたり、なかったものと考えたりしてよいということにはなるまい。

近代の効率的合理性の最大の被害者は、老人と女性である。老人は弱い、女性も弱い。近代的偏見によれば、女性も老人も「経済合理性」には向いていないと考えられる。女性は家庭にとどめられ、女性の家事労働は価値

評価の対象にならない。家事を助ける老人の労働もそう。女と老人は、一般に、「女であること」と「老い」は、全くの非効率であり、社会に貢献しないというわけである。それでも人間であることは事実だから、仕方なしに給料の中の「扶養家族手当」の対象にしたり、社会保障的政策で何となく社会的に位置づけてお茶を濁しておく。しかしどころんでも、近現代社会では、老人と女性の位置は「居心地がよくない」のである。女と老人は社会のクズだが、表向きは心配りをおこう、といった対応しかなされない。

しかし皮肉なことに、現代では少しずつ、この負の状況への反撃が開始しはじめている。フェミニズムもそのひとつだ。「皮肉」というのはこうだ。あれほど「若さ」「強さ」を要求する近代の生産技術至上主義は生産力の向上と医学その他の知の前進によって、クズであるはずの人間群（とくに老齡者群）を膨大に生んでしまった。生産至上主義と技術革新のおかげで、物質生活が向上し、平均寿命も長くなってきた。本来「若く強く、多忙であること」を誇る近代社会は、それを抑制する「老い」を生んでしまったのである。しかし、「若さと強さ」、「青

年主義」の看板はおろさない。皮肉な結果として生れた「老い」に対しては、まともに対応する基準を近代社会はもちあわせてはいない。

例えば、家族に目を向けてみよう。かつての大家族、大家族は近代に入り縮小し、核家族化していく。つまり、かつては「老い」が独自の機能をもっていた家族は解体し、「老い」を追放する核家族化が激しい速度で進行する。子供は未来の生産人口だから一応大切にされるが、不生産的な人口たる老人群はいるべき場所がなくなる。この現実には、経済合理主義的市民社会が家族をもとらえ、家族の中に市民社会原理（つまりは効率主義）をもちこんだことの結果である。結婚する若ものたちは、女であれ男であれ、いつのまにか近代主義のイデオロギーを内面化し、ジジ・ババ扱きのマイ・ホーム主義が進歩的と考えるクセがついている。戦後日本の社会科学界にみられたように、封建的大家族の解体は進歩だと考えた進歩主義の学者も多かった。学者もふつうの常人も、同じ思想で動く。老いはダメなのだ、いつまでも若くてたくましい生産人間であることが肝心だ、という観念はひとつのポセッション（固定観念）となって人びとを病

的なまでに駆る。このイデオロギーが強いかがり、それを信じる当人の「老い」の時期は無惨である。自分を敗残者として位置づけることを自分に強制しているからだ。それを免れたいときに、人びとは新興宗教に走る。こうして現在、人びとは大小の「神々」にすがろうとしている。人生の終局を早々とみてしまった若者たちですら、精神的に自分を老化させ、老い急ぐかのように「神々」の足下にひれ伏そうとしている。一方で「若さ」にうかれた消費人たりつづけながら、他方では早々と精神的に老化していく。こういう現代人の状況は、生産至上主義、多忙主義、効率主義しか人生の価値基準をもちえないことから生れているのだらう。何ごとか企てられねばならない。

かつて「老い」を上手に処理していたとおもわれる（いいことばかりではないが）過去の時代と文化の中に、「老い」を考えなおす手があるのだらうか。過去は過去であって二度と復活しない。しかし過去の中には、まだ十分に開花しない種があるかもしれない。発展可能性を秘めながら、現実化をひたすら待ちつづけるものがあるかもしれない。こういう目ざめを待つ可能なもの、

過去の中に眠る「未来」の精神があるかもしれない。私たちは、過去の中に過去を探すのではなく、未来を探すのである。それはやってみるに値する企てである。例えば、前にのべたように、「暇がある」ことが人生にとって最大の価値であると久しい間——人類と共に久しいのではないか——考えられてきたのはなぜか。過去の人々も食うことに忙しかった。私たちよりもずっと忙しかったに違いない。けれども彼らは、食うために多忙であること、つまり生産至上主義と効率合理主義を価値基準にせず、食うために多忙に生産する活動は人間をイビツにすると考えた。生産なしには人は生きることができない。しかしだからといって生産を価値化しない。未開人は、生産もするが、それから解放されて、あたかも老人のように「のんびりと談話して生きる」ことに人生の喜びをみいだしていた。前近代の人びとも、地域をとわず、やはり「ヒマの中で生きる」ことに究極価値をおいていた。多忙（ビジネス、具体的には商業、金もうけ）が社会生活と個人的生活を破壊することを直観的に見抜いていたと言える。かつて、ホイジンガは『ホモ・ルーデンス』の中で、未開から近代直前にいたるまで、「遊

戯」が社会的規範でありつづけてきたことを解明した。「ヒマがあること、ヒマの中でのんびり生きること」とは人生を遊戯的に設計することである。こうした事實は、過去の中の未来要素である。現代人は近代の初期よりもずっと多忙になっており、レジャーでさえ「仕事化し」、多忙をきわめてレジャーランドに走っていき、走って帰る。こんなことでは、人生はますます疲労するばかりだ。

かつての「老い」は現代のごときクズではなくて、人生の多忙から解放された遊戯人のモデルであったのではないか。老いることは悲しいことでも敗残者になることでもなくて、これから人生の理想状態に入る段階ではなかったのか。老いの社会的機能は、人生の他のどんな局面よりも大きく、それはどこかで、いやそれどころか本質的に、「ヒマ」と「遊戯」に結びついていたにちがいない。

これはほんの一例にすぎない。過去にあっただろう、あるいは人類がきつと体験しただろう「老い」の積極的価値は、人類学、民族学、精神医学、等々の努力によってこれから発掘されると期待される。そのためにも、私たちは、「生きる」ことについての新しい価値転換をは

好評新刊書より

双書<大地の声・農民の声>

荒れた農村から 戦争の足音が聞える

薄井清著 いま農村で何が起きているのか。近郊農業の現場からの衝撃のルポ。定価1800円

むくろあこら 1

ペレストロイカを読む

再生を求めるソ連社会
和田春樹編 ソ連社会は、どう変わろうとしているのか。ソ連<第二革命>の全貌。定価1800円

あこら叢書 最新刊

日本経済の 神話と現実

高度成長の経済学

降旗節雄著 高度成長の歴史的位相を明らかにし、流動する日本経済を徹底分析。定価2600円

日本人よ、侵略の 歴史を忘れるな

旧日本軍一兵士の記録と回想

澤昌利著 軍隊日記にひそかに記された比類なき日中戦争の記録。一千枚の証言。定価2600円

——あこら叢書*好評既刊——

野蛮としての伊社会

関嶺野著 定価2600円

北の友へ南の友へ

和田春樹著 定価2400円

御茶の水書房

〒102 東京都千代田区九段北1-8-2
電話03-265-5746/振替東京8-14774

からねばならない。ニーチェの価値転倒はまだどこか青年中心主義のところがある。「金髪のライオン」のイメージは、ギリシア的青年のイメージを保存している。これだけではダメだろう。青年も重要だが、老人も重要だ。「老い」の問題は、社会構造の編制、世代間の相対的に平和な序列づけ、価値意識の方向づけ、などの多面的側面をふくむ。これらの探求が蓄積されてはじめて、私たちはまっとうに「老い」に取り組むことができるようになる。

現代の社会科学は「老い」に本当の意味では直面していない。それは、一方では、「老い」を自然年齢階梯の終局場面でのみとらえている、つまり「老い」を単なる生物学的な衰弱としてとらえていて、ついには「老い」

の担い手たちを「何とかあわれんでやるべきお荷物」とみなしている。他方では、社会科学（とくに社会政策論、社会保障論、経済学、行政学など）は、今もなお徹頭徹尾、経済合理主義・効率主義のイデオロギーの囚人である。両面は同じことの別のあらわれである。社会科学がまともに「老い」を真の問題として気付くには、自己のイデオロギーを自己批判的に解体しなくてはならない。効率・合理主義のヴェールの中では、「老い」はいつまでも生産にとつての妨害物、財政圧迫要因、殺すわけにはいかない動物的存在としてしかみえてこないだろう。この意味で、「老い」という問題は、社会科学または人文科学の生死を左右する試金石になりうる。そして同じことは、思想や哲学にもあてはまることだろう。

「老い」は多面的にアプローチすべき未開拓分野である。すでに、多田富雄教授と私が編集した『老いの様式』（誠信書房刊）が示唆しているように、（一）生理学的、医学的アプローチ、（二）精神医学的アプローチ、（三）社会科学のアプローチ、（四）文学、芸術的アプローチ、（五）哲学的アプローチ、などが試みられなくてはならない。一人の「老人」を全面的に理解することでも大変である。「老い」は底の深い問題である。自然科学的研究は、「老い」の自然史的側面を教えてくれるだろう。社会科学は、社会関係の中で、社会関係としての「老い」を説明するだろう。文学を含む芸術的想像力は、「老い」の美醜のみならず生き方をも描写してくれるだろう（例えば、アナトール・フランスの『シルヴェストル・ボナール』のように）。哲学や思想は、観念としての「老い」の中にある生ける時間性や遊戯性の本質論的説明を企ててくれるだろう。

急増する高齢者人口を前にして私たちは場当たりでも何かをしていくことだろうが、それだけではとても「老い」を理解し、それがつきつける諸問題を解くことはできない。急がねばならないのも確かであるが、いたずらにあ

せることも禁物だ。ゆっくりと、それこそ老人のようにのんびりと、たっぷり時間をかけて、「老い」をめぐる思索を深く着実におしすすめなくてはなるまい。「老い」に触れるには、「老い」の本来の在り方である「ヒマ人間」「遊戯人」として思索することが必要である。精神はいやが上にも鋭敏にしつつ、同時にたっぷり時間を浪費すること。

●文献表

宮内博一『老熟時代——実りある老い、かろやかな死——』海竜社

多田富雄・今村仁司『老いの様式——その現代的省察——』誠信書房

J・ボトウィニック 村山冴子訳『老いの科学』G L 叢書4、ミネルヴァ書房

西沢江美子『自分は老いときあう』学陽書房

伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明 編『老いの発見——4・老いを生きた場——』

岩波書店

伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明
編『老いの発見——5・老いと社会システム——』
岩波書店

日野原重明『老いと死の受容』 春秋社

伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明
編『老いの発見——3・老いの思想——』 岩波書店

思想の科学研究会△老いの会▽『老いの万華鏡——「老
い」を見つめる本への招待——』 御茶の水書房

伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明
編『老いの発見2・老いのパラダイム——』 岩波書
店

伊東光晴・河合隼雄・副田義也・鶴見俊輔・日野原重明
編伊東光晴『老いの発見——1・老いの人類史——』
岩波書店

村田忠良『老いの人間学』 中央出版社

D・P・バラシュ 中元藤茂訳『エイジング・老いの発
見』 人文書院

太田保世『老いの構図——その美学と人間学——』
東海大学出版会

日高 登『老いは問う——老人ホームの日々——』

朝日新聞社

大熊一夫『あなたの「老い」をだれがみる——朝日ノ
ンフィクション——』 朝日新聞社

高齢化社会をよくする女性の会『女・老いをたのしく——

第3回女性による老人問題シンポジウムの記録、フェ
スティバル・女性がつくる老後の……』 ミネル
ヴァ書房

田辺順一『老い——貧しき高齢化社会を生きる——』

平凡社

日野原重明『老いを創める』 朝日新聞社

荊木 裕『「老い」からだところの検証』 田畑書店

橘 寛勝『老いの探究』 誠信書房

高齢化社会をよくする女性の会『女・老いをゆたかに
——第2回女性による老人問題シンポジウムの記録
——』 ミネルヴァ書房

山口信治『老いにゆらぐ家族——長い老いの山陰をど
う登るのか——』 OP叢書50、ミネルヴァ書房

村山冴子『老いを豊かに——3・老後の設計——』
日本基督教団出版局

金子 仁・赤星 進『老いを豊かに——2・老人のか

らだと心——』 日本基督教団出版局

船本坂男『老いを豊かに——1・老いを生きる——』

日本基督教団出版局

森 幹郎『断章・老いと死の姿——死ぬことの社会学

——』 保健同人社

H・J・シュルツ 古沢悠子訳『老いの豊かさ——人

生の実りのとき——』 新教出版社

高原須美子『女は三度老いを生きる——高齢化社会を

生き抜く知恵——』 海竜堂

穂永 豊『老人心理入門——自分も気づかぬ老いの心

——OP叢書24、ミネルヴァ書房

高野 澄『歴史に学ぶ老いの知恵』 OP叢書22、ミネ

ルヴァ書房

佐古純一郎『豊饒の季節——豊かな老いの生き方——』

PHP研究所

樋口恵子『愛しきは老い——文学の文の老人たち——』

PHP研究所

ジュレミイ・タンストール 光信隆夫訳『老いと孤独

——老年齢者の社会学的研究——』 垣内書店

シモーヌ・ド・ボーヴォワール 朝吹三吉訳『老い』上・

下、人文書院

柄澤昭秀『老人のぼけの臨床』 医学書院

長谷川和夫『老人心理へのアプローチ』 医学書院

小池保子『老人医療福祉論——自分史からの接近——』

ドメス出版

小笠原祐次『老人福祉を問い続けて』 筒井書房

金子善彦『老人虐待』 星和書店

三宅貴夫『老いの心を知る——老人を支える人たちへ

——』 保健同人社

村田松男『老人クラブを見直す——その活性化のため

に——』 OP叢書62、ミネルヴァ書房

三宅貴夫『ぼけ老人と家族への援助』 医学書院

三吉 明『老人と福祉』 敬文堂

三吉 明『高齢化社会と老人問題』 有斐閣

E・W・バージエス 森 幹郎訳『西欧諸国における老

人問題』 社会保険出版社

カルドマ木村哲子『老いのスケッチ——アメリカ老人

の光と影——』 誠信書房

宇治谷義雄『老人福祉入門——その実際と心とからだ』

新版、川島書店

菅原恵子『家庭看護読本』——老人とともに暮らす知恵

——『増補改訂 ゆたかなくらし選書、同時代社

大原健士郎『老いの心と健康』 老人看護双書13、中央

法規出版

原田正二『老人と生きがい』 老人看護双書12、中央法

規出版

福智 盛『たのしい老人大学』——生きがいの創造——

創元社

鴨脚 清『老人と家族の福祉社会学』 いなほ書房 星

雲社

田中多聞『老人——上・その心とからだ——』 日

本放送出版協会

田中多聞『老人——下・その看護の実際——』 日

本放送出版協会

金子仁郎・新福尚武『講座日本の老人——1・老人の

精神医学と心理学——』 垣内出版

那須宗一・増田光吉『講座日本の老人——3・老人と

家族の社会学——』 垣内出版

岡村重夫・三浦文夫『講座日本の老人——2・老人の

福祉と社会保障——』 垣内出版

塚本 哲『老人社会福祉』 社会事業新書、ミネルヴァ

書房

孝橋正一『老後・老人問題』 ミネルヴァ書房

金子仁郎『老人の心理と精神医学』 金剛出版

片多 順『老人と文化——老年人類学入門・日本の中

高年・7——』 垣内出版

副田義也『講座老年社会学——3・老齡保障論——』

垣内出版

副田義也『講座老年社会学——2・老後問題論——』

垣内出版

副田義也『講座老年社会学——1・老年世代論——』

垣内出版

井上勝也・長嶋紀一編『老年心理学——現代の心理科

学——』 朝倉書店

戸川行男『老化的プロセスと精神障害——老年心理学

をめざして・日本の中高年・4——』 垣内出版

土岐雄三『非行老年のすすめ』 山手書房

野上芳彦編『老人へのボランティア活動』 福村出版

前田信雄『老人の保健と医療』 日本評論社

大友英一編『老年学読本（からだの科学増刊）』 日本

評論社

イラ・J・タンナー 新里里春訳『孤独——愛情恐怖

症——』 社会思想社

M・ジェイムス、D・ジョングウォード 本明寛、織田

正美、深沢道子訳『自己実現への道——交流分析の

理論と応用——』 社会思想社

清水昭俊『家・身体・社会』 弘文堂

レヴィーストロース『親族の基本構造』 番町書房

アナトール・フランス『シルヴェストル・ボナールの罪』

岩波文庫

ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』 中央公論社

イリイチ『ジェンダー』 岩波書店

フィンク『遊び』 せりか書房

今村仁司『思想の晩年様式』 『現代思想の系譜学』所

収 筑摩書房

馬場謙一他編『日本人の深層分析11巻 老いと死の深層』

有斐閣

ジャンケレヴィッチ 仲沢紀雄訳『死』 みすず書房

アリエス 伊藤・成瀬訳『死と歴史』 みすず書房

アリエス『死を前にした人間』 みすず書房

中野卓・小平朱美『老人福祉とライフ・ヒストリー』

未来社

宮内美沙子『看護病棟日記』 未来社

豊田正子『花の別れ』 未来社

モーゼス 加藤恭子訳『モーゼスおばあさんの絵の世界』

未来社

中村光夫『老いと微笑』 筑摩書房

阿部初枝『お年寄りと暮らす』 筑摩書房

今井美沙子『彼岸花』 筑摩書房

徳廣睦子『兄の左手』 筑摩書房

田邊順一 写真・文『老い 貧しき高齢化社会を生きる』

平凡社

今村仁司(いまむろ・ひとし)

一九四二年、岐阜県に生まれる。一九七一年、京都大学

経済学部大学院博士課程終了。現在、東京経済大学教授。

著書に、『歴史と認識』(73・新評論)、『アルチュセー

ル』(77・清水書院)、『労働のオントロギー』(79・勁

草書房)、『暴力のオントロギー』(80・勁草書房)、『批

判への意志』(81・冬樹社)、『社会科学批評』(81・国

文社)、『現代思想の系譜学』(86・筑摩書房)がある。

書店がなくなる？

丸三書店 井門 照雄

最近入手した資料の中に、私達書店を取りまく環境を知る上で重要だと思われる記述があったので、紹介を私見を加えてゆきたい。

全国で二万店が消えた

通産省の「商業統計」によると、昭和五十七年から六十年にかけて、九万二八四五店の小売店が減少した。これは日本全体の五・四パーセントにあたる。しかしこの数は、廃業から開業を差し引いて算出したもので、廃業率は一三パーセント前後あるとみられるが、廃業分からの転業も含む開店はほとんどなく、他分野からの移入による開業が大半である現状を考慮すると、全国から二二万店ぐらいの小売店が消えてしまった事になる。

しかも商業統計を業種別の時系列でみるならば、昭和五十一年から五十四年、五十四年から五十七年へと、すでに減少の兆候は発生しその度合は強まっていたのである。

衰退傾向にある業種をみると、鮮魚、食肉、青果を代表とする生鮮食料品を筆頭に、乾物、菓子、パン、米穀、豆腐などの一般食料品から呉服、紳士服、靴、履物、洋品雑貨、家具、楽器、金物、文房具、時計、眼鏡、玩具、娯楽用品などに至るまで、多様な業種におよんでいる。

そして、今回調査の昭和五十七年から六十年にかけては、衰退業種の領域がさらに広がり、ほとんどの業種におよんでいることが明らかとなった。

商店街そのものの衰退

とくに、小売店の大半は商店街という立地に位置しているのだが、商店街そのものもまた、大きく全国的に停滞化の状況にある。

中小企業庁の「商店街実態調査」でも、約九割の商店街は売上不振を強いられている。この実態は五十六年度

の調査結果である。

最近では、無店舗販売の進展、大型店の充実、立地条件の郊外部と都心部の明暗、カー・ショッピングの定着、経済力格差の拡大、商業地価の高騰、消費者の商店街離れなど廃業の傾向に一層拍車がかかっている。歯抜け状態の商店街も急に目立っている現状も加味すると、商店街における衰退の実態は予想以上に深刻化していると考えられる。

今後、このままでは小売店および小売店からなる商店街の衰退現象は、何かしらの手を打たなければ、強まることはあっても弱まることはないのではないかと思われる。

「淘汰」を、環境変化に対して自らの意思にもとづいた選択適応の余地がないことを意味する言葉と考えるならば、まさに商店街はそのような淘汰の時代を迎えているといえる。

書店の現状

このような小売店のおかれている状況は、そのまま我々書店業界にもあてはまる。さらに商店街に立地する書店は全国に圧倒的に多いのである。そしてその立地基盤で

ある商店街が衰退、淘汰の時代を迎えている。

最近の傾向としては、商店街の平均的書店が廃業し、百坪前後の郊外店の出店が相次いでいる。現在の所、出店数と廃業数の関係が面的に増加傾向で推移しているのであまり問題にされてないようであるが、愛媛県の実況をみると、一つの書店の出現は一つの書店の滅亡を意味している。そしてその新しい書店は雑誌、文庫、実用、児童そしてコミックが主であって、決して専門書やハードカバーの本を積極的に販売する事はないのである。一冊一冊の本をだいに扱っている書店は今まで通り仕入をしたいが、しかし販売数、過去の実績によって配本がなくなり、常備店からはずされ、雑誌中心形の店に変更せざるを得なくなるのである。

商店街の衰退、出版社による厳しい選択によって没個性化が進んできた書店にとって今後いかなる方向を目指すさなければならぬか今結論を求められていると考える。

たとえば、今日書連で進めているSA化もその一つの手段であろうと考えている。これは書店自身が現在まで単品管理をしないで生きてくる事ができた唯一の業種であったわけだが、書店が小売店としてやらなければなら

ない最低限の事をするためにどうするかという事への方法論である。

当然の事ながら単品管理をすれば、棚からはずれる商品もあれば、新たに追加される商品が出てくるわけで、その試行の中で店の個性化がはかれてくると考えている。

ただ書店が棚に置く本を選ぶと言う習慣が一部の書店を除いてないという事で、書店が自らで売上分析をし品揃えをする事に対しての出版社の反応はまことに冷たく、自らの選択は是であり、書店の選択は非であるかのごとく受けとられる。人文会の特約書店が百店以上あるにもかかわらず百坪以下の店が五店しかない事はこの事を裏付けているのではないだろうか。

お互いが良かれと思ってやってきた事が、今お互いの首をしめようとしているのである。

四国の現状

現在四国での出店は、香川M書店、愛媛H書店を中心として動いて来たが、ここに来て、高知のスーパー系書店が七月八月で三店出店、さらに十月には愛媛にも出店と台風の目になっている。他の出店もあるが他産業から

の参入が主で政治力と経済力を持ったオーナーが目立つ。さらにほとんどすべてが郊外店であり、ここ数ヶ月の傾向は専門書店ではなく、レンタルビデオを中心とした複合型書店である。

今年に入って目立つ事は先程もふれたが、出店数と廃業数がほぼ同じことである。ただ面積は出店の平均面積が圧倒的に大きいため増加傾向は変わっていない。

利益を優先すべきか、それともぎりぎりの所で営業しながら一冊一冊の本とお客様、読者との接点にいかにおくかを優先すべきか、選択はむづかしい所である。ただ一つ言える事は書店はまず自らが甘えをなくし、仕入、販売で自立し、その上で取次、出版社に対しその流通などにおける矛盾を解決する方法を訴えるべきであろうと考える。

書店が自らの足で歩き出して、始めて三位一体、一緒になって業界が前進する素地ができるのではないだろうか。書店が街からなくならないためにも、今こそ体質改善が必要だと思う。

有隣堂書店・人文会合同ミニ研修会報告

本年七月十三日、横浜・有隣堂書店の会議室にて、有隣堂書店各店の人文書担当者の方たちと人文会有志によるミニ研修会を開催しました。この会は、昨年二月におこなわれた研修会のあとをうけて、半年に一回ずつ会合を重ねてきた結果、こんどは少し趣きを変えてみようという東口店、北沢誠氏の発案で、編集者のレクチャーを中心にしたミニ研修会という形式をとることになったものです。はじめての試みなのでそれぞれに思惑の違いがあったりしましたが、有意義な集まりになったと思われます。お二人の編集者にこの会の感想を以下にレポートしてもらいました。

弘報委員会

研修会に参加して

勁草書房 富岡 勝

書店さんの要望と編集者の関心をいきなりぶつけたらどのようなスレ違いが起るかという見本のような出来事——これが今度の研修会での私の感想です。この現実を噛

みしめながら報告してみます。

有隣堂の北沢さんから、今回のレクチャー——というほどのこともありませんが——のテーマは、現代思

想、言語論、記号論など何でも結構です、といわれました。それでも困るので結局自分の関心に引き寄せて「現代英米哲学と言語」というテーマを選びました。終了後、幾人かの方から好意的なご挨拶をいただいたのを除けば、さっぱり分らなかったというのが大方の感想のようです。その点は大変申しわけなかったと思っています。自分にもよく分っていないこと、はしょってしゃべったところが沢山ありましたから、お分りいただけなかったのは、当然といえば当然です。しかしそれ以上に、書店さんの側は人文書の売れ行きの鈍化をどう防ぐか、棚をどう活性化するか、ということに関心をおもちでしたのに、私の方には、これにお答えするすが全くないというのが根本の原因です。勿論、これは初めから分っていたことです。でも、それに答えられる編集者が、一体いるでしょうか。とすれば、一編集者の関心をともかく聞いていただくより仕様がな、というのが覚悟でもあり、結論でもありました。

現代思想を中心とする人文書の売れ行きが純化しているのは、現代思想と呼ばれる分野が、内容的にも量的にもほぼ飽和点に達しているからだ、と私は考えておりま

す。レヴィ・ストロースやフーコー、デリダといった人々の翻訳は、あらかじめ出揃いましたし、解説書、研究書も沢山あります。フランスについては、ブルデュー、セール、レヴィナスなどが、次の「目玉」として売り出されていても、今一つ活気がありません。フランクフルト学派がアメリカの一部で評価され、その波が日本での根強い人気と重なり、アドルノやベンヤミンのリバイバル現象もありますが、マルクス主義の凋落という深手のために、盛り上りは、これまたもう一つ、です。ビッグスターが消え去ったあと、まだその空白が埋め切れていない、群れのパラダイムが分立している、そんな状態です。

そこで、今こそ英米哲学ですよ、といたいところですが、なかなかそうも行きません。しかし、それまで英米が不当に——と私には思われます——軽視されてきたことも事実です。アカデミズムはドイツ哲学、ジャーナリズムはフランス思想という分業体制の狭間で、見事に落っこちてしまったのが英米哲学です。言語分析を中心とする強い論理性、気宇壮大な世界観や悲愴な人生論でなく、経験論を母胎とする地味な議論が、独仏になじ

んだ研究者や読者の受け容れるところとならなかったの
でしょう。この傾向は、それでも、徐々に変わりつつあり
ます。一つには、世界を一挙に説明しようとするグラン
ドセオリーの崩壊、あるいは、物語の失効というポスト
モダン状況の現出、もう一つは現代思想の中心的な課題
である言語を考えるとき、英米の成果を無視できないと
いうことの再認識のためです。

実際、英米哲学——これまで普通分析哲学と呼ばれ
てきました——は、言語の哲学です。どうしてそうな
のか、というのが、今度の研修会での私の中心的な論点
だったのですが、ここが実は一番難しく、かつ説明的で
つまらないところでもあったので、再説はやめます。と
もかく、フレーゲ、ラッセル、日常言語学派、人工言語
学派などについてお話ししました。今しばらく私は、英
米哲学をせめて独仏と並ぶところまで押し上げる作業を
続けるつもりです。勿論この仕事は、一編集者や一出版
社の努力でどうなるというものでもありません。学界や
論壇だけでなくAIや遺伝子工学などの科学技術の進展

を含む思想状況全体の動向に裏打ちされていなければ不
可能なことです。私なりに成算はあります。が、実際ど
うなるかは全く分りません。ただ、もし英米哲学がある
程度の市民権を得たならば、あるいは逆に英米が市民権
を得るほどに社会が成熟するならば、思想の布置連関も
変わるだろうと思っています。

ゲストが来て話をする今回のような形式は、初めての
試みだそうです。書店の方々の素顔が拝見でき、直接コ
ミュニケートできるチャンネルが開かれたことは、私に
とってはとてもいいことでした。しかし、正直なところ
大変疲れました。テーマの選び方や話し方のまずさを棚
上げしていえば、この疲れは、ここ七、八年これぞと思っ
て出した本が売れなかったときの徒労感に似ています。
このことは、分りにくい話を聞かされた書店さんの側も
同じだったでしょう。いずれにせよ、残念ながらおいし
い話はないのです。スレ違いに耐えながら、コミュニケー
ションを続けるほかない所以です。

感想

筑摩書房 間宮幹彦

女子大学生にとって人気のある職種は、第一にテレビのニュースキャスターであり、第二に出版社の編集者である、という話があります。第一はよくわかるけれど、第二については出版産業なんて斜陽産業なのになあ、と首をかしげつつ、「それにしても出版は」と、ある著者が言いました、「鉄鋼なみの底冷えだと思ってきたけど、どうも最近は石炭産業じゃないかと思うよ」と。

人文書や文芸書と呼ばれる本が、大多数の人にとって本のイメージの中心にあるとすれば、それらの本はいちばん石炭らしい石炭ということになるわけです。ですから、出版産業としての、あるいは本というカタチの、動

揺・衰弱・変容・模索は、このジャンルに敏感にあらわれていると言えるのかもしれませんが。活字離れとか活字文化の危機といった言い方がなされる場合にもこのジャンルを指していることが多いように思いますが、そもそも「活字」じたいが「写植文字」によって駆逐され消滅しつつありますから、本当は死語になりかかっているわけで、事態は技術メディアの変化とパラレルのように思われます。

もっとも技術メディアの変化によっていちばん影響を受けにくくて、保守的に本というカタチを残すのもこのジャンルなのでしょう。つまり、まわりは電気、石油、

歴史と メタファー

社会変化の諸相

R・A・ニスベット／堅田剛訳 さまざまな社会思想を検証し、人間の歴史観を根底から問い直す ■定価四〇〇〇円

書くことと 肉体

G・ジョシボウィッチ／秋山嘉訳 イギリスの俊英批評家が、自らの創作体験をもとに「書くこと」と「肉体」の関係を明らかにする。 ■定価二八〇〇円

自閉症児と 生きる

A&F・ブローネ／布施佳宏訳 豊かな臨床経験をもつ著者たちが、原因も治療法もよくわかっていない自閉症をめぐる問題を詳述する ■定価三三〇〇円

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3 ☎(354)0131
(出版部)
東京都世田谷区桜丘5 ☎(439)0125

原子力にとってかわられても、どこか石炭であることに固執せざるを得ないところがあるようなのです。それでいて激しい変化に対して素早くアンテナを張り、そのアンテナにとらえたことを表現しなければ生命をもちえないのもこのジャンルではないでしょうか。石炭でありつつ、原子力でもあること。

ここらで石炭の喩え話から離れる必要がありますが、人文書に関わりをもつ面々を悶々とさせている事態は、本というカタチが歴史や文化の中で占めるウェイトと役割が変容してきている——知識の集蔵・伝達の面からも、思考や感受性の表現の形態としても、大衆化と結びついた娯楽的な性格においても変容してきていることと、それに技術的なメディアの変容が交差するところに生じているのだと思います。そこには「何も文字でなくともいいではないか」とか、「何も文字が紙の上になくてもいいではないか」といった、さまざまなレベルでの脅迫的なささやきがあるような気がします。

と、何か大風呂敷を広げるような物言いになりましたが、実は、私が本を企画したり編集したりするときは、もってポンヤリとしたものにうながされています。

あまり悶々ともせず、ほとんどヤマカンだったり、ちょっとした偶然の糸を二つ三つよりあわせてただけだったりする場合もあるわけですが、それらをあえて一つの風呂敷に包んでみようとする時に、先に述べたようなことが背景にあるのだろくな、と意識するということだけです。人文書というジャンル意識もあらかじめはあまりないと言ってよいでしょう。反省的に整理しようとする時に浮んでくる枠組の一つです。(もともと「人文会ニュース」のバックナンバーを読んでかなり頭にコビリついてきました。)

私はどちらかというと、具体的な著者の書くものに魅かれてそれに則して本づくりを考えてきましたが、どういうふうに関心を魅かれたかをふり返してみると、その著者の活動の描く求心的な渦のイメージが、時代や文化の動きをあるレベルの焦点に収斂させる力をもっていると直観された時に、興味をかきたてられたように思えます。(こういう言い方に疑念を感じているのですが、本音でもあるのです。) しかもそういう大きい渦が一つか二つあれば充分満たされるような気がしたのですが、そういうアプローチも著者の存在の仕方、現在は難しく

なっているのではないでしょうか。むしろあちこちに小さな渦を発見したり、つくり出したりする身軽なフットワークが必要になっていくように思われます。あるいは求心的な渦だけではなく遠心的な拡散力にも注意しなければ、とわけもわからぬまま言ってみたい気がします。

ところで、私がこれまで担当してきた本は、ほとんど人文書か文芸書に入ってしまうようなのですが、それがまた、書店の方を困らせる「どこの棚においてよいかわからない」ものがかなり多くあることに気付かされます。専門的な性格を強くもった場合でも、そこから逸脱しているような、少しずらしたような本をつくりたいという欲求があります。専門ということにつきあう根気がなかったり、ちょっとヒネクレているだけかもしれないが、人文書で評判になる本は、しばしば既成のジャンルからハミ出している分類にくいものではないでしょうか。

確立された領域の外や、領域と領域の間に新しい胎動が生じるのは必然的なダイナミズムなのだろうと思いますし、おそらく人文書担当の書店の方の苦勞と秘かな楽しみは、これらのハミ出し本の間にある脈絡をつけたたり、崩したりしながら、棚をつくることではないのかと想像します。

これからますます予想のつきにくい、由緒正しいようないかがいのような本が、このジャンルには出沒すること間違いなしで、やや枯木も山のにぎわいといったムキもないではありませんが、出版社や書店はその意味で愉快な苦勞が尽きないのだらうと思います。ですから、女子大学生に人気のある職種の第二も理由のあることであって、そこには疲勞や停滯と隣りあわせの変化と新しい動きがあるように思えるからなのかもしれません。

(87・8・25)

「本屋さん」の本を誰が買ったか

村上信明

作家、批評家、学者らのエッセイを収めた

『「本屋さん」との出会い』（洋泉社編・発行、一三〇〇円）が七月二十五日に発売された。この本は、書店経営情報誌「日販通信」に連載中の巻頭随想「書店との出会い」のなかから洋泉社が七七編を選んで構成したものだ。その書名が語っているように、七七名の著者が本屋への想いをつづった本、出版評論家・小林一博さんの表現を借りれば「書店さんに対する一種のラブレター」である。

この本が出たとき、洋泉社と親しい出版社の営業マンの間で密かに「賭け」が行なわれた。この本が何部くらい売れるだろうか、という読み比べをやったのだ。初刷は四〇〇〇部、「日販通信」と日販の読者向けPR誌「新刊展望」が刊行記念特集を組むことは前

もって知らされていた。

「賭け」は次の三派に割れた。実売三〇〇〇部程度という悲観派。四〇〇〇部は何とかクリヤーできる、うまく行くと五〇〇〇部は可能という中道派。六〇〇〇部は出る、案外八〇〇〇部に届くかも、という期待派。

悲観派は企画自体を問題にした。洋泉社編集部編とあるが、「日販通信」に載ったものをそのままにしただけ、実質的には日販広報室編である。大取次の書店経営者向け雑誌であることを前提に書かれた文章を一体誰が買うのか。書店主や店員はむかしから本を買ってくれないものなのだ。一般読者も興味がない。と、版元には気の毒なくらい冷たい意見を吐いた。

中道派は、本のつくり方に若干の難はあるが、そこそこの市場はあるとした。洋泉社編

とするなら、旧原稿の加筆、修正を著者に促すべきだった。本の帯に「それぞれの出会い」と書店論」とあるが、「書店論」の方が弱いのは惜しまれる。けれども作家や批評家がこぞって「本屋さん」にラブコールした本はこれまでなかったので書店は歓迎するだろう。と、無難な論を展開した。

期待派は、企画はこれでよし、業界関係者はもとより、一般読者にも受けると期待を込めた。「本屋さん」との出会いについて書かれたものだから、変に手を加えると新鮮味がなくなる。雑誌に発表したものをそのまま本にするのはけしからんといっていたら、書店の新刊コーナーは不要になろう。著者が書店をどう思っているのかは出版社、取次も興味のあるところだ。商業・ビジネス雑誌が書店特集を載せると通常号よりも売れるというから、この本も売れていい。と、版元を支持した。

洋泉社によると、主要書店の事前の反応はすこぶるよかったようだ。この手の本は五、六〇〇〇部は堅い、一万部行くかも知れない

という書店がかなりあったという。「日販通信」の連載を読んでいる書店幹部やベテラン書店員がそういうのだから、外交辞令ばかりではない、と版元は踏んだ。しかし、そこは慎重に構え、四〇〇〇部でスタートしたのであった。

さて、「賭け」はどうなったか。

『本屋さん』との出会い』は、発売後ほぼ二週間おきに一〇〇〇部ずつ増刷し、九月初めに計四刷七〇〇〇部に達した、注文短冊は日販系、東販系に関係なく、全国広い範囲の書店から届いているという。暑い季節で、しかも有力書店の決算棚卸し期にあたる発売にしては、返品はまだ百数十部と少ない。「賭け」の軍配は期待派に上った。版元にまずはメデタシといわねばならない。

たかが三〇〇〇の増刷ではないか、という向きもあるが、総勢三名の版元にとってこれは大きい数字なのである。正直いって、こんなペースで売れて行くとは、版元自身も予想していなかったのではないか。一回一〇〇〇部ずつという少部数の増刷が、何よりもよく版元の半信半疑の気持を表わしているよう

に思う。

これ以後の増刷について版元は、在庫がなくなってもしばらく様子を見てから決めたいと話す。夏バテは秋口にやって来るというから、それが賢明な策だろう。

『本屋さん』との出会い』が悲観派の予想に反して売れたのは何故かと考えた。思いあたる節は三つある。

一つは企画の産みの親、日販の応援。日販は発売に合わせて、この本の著者側から二名（蓮實重彦、小林一博）に書店側一名（東京旭屋書店常務・田邊聰）による刊行記念鼎談を「日販通信」「新刊展望」の両八月号に載せ、書店と読者の両方にキャンペーンした。

二つ目は有力書店の側面援助。紀伊國屋書店は洋泉社との共催で、この本の著者三名（柄谷行人、平出隆、三田誠広）によるトークイン「本屋さんと出会う」を紀伊國屋ホールで開いて雰囲気盛り上げた。また旭屋書店は「キープ・スマイルとか、キープ・クリー」とか、あるいは『ありがとうございます』を言いなさいと百回言うよりも、この本を一

冊読ませたほうがはるかに有益」（前述の鼎談における田邊聰さんの話）と社員の参考書に指定した。

三つ目はこの本に登場した書店の協力。この本には、古書店、廃業店を含め約九〇軒の書店の名が出ている。これらの書店は当然ながら平積みしたところが多かった。中小規模の書店では「お宅のことを何々さんが書いているよ」と客の方が自分のことのように喜んでくれたという話があるから、これを置く店のPRになった。

と、ここまでは思いあたった。「本屋さん」賛歌の本だから取次、書店が協力して売るのは当り前の話である。全国の書店が一部ずつ買っても軽く二万部は突破しよう。が、四刷七〇〇〇部という数字を持ち出すまでもなく書店自身の買った部数はそれほど多くない。何十部と売った書店も、買ったのは圧倒的に客の方が多かった。買わなくても読めるという書店の特権はあるにしても、書店よりも一般読者の方が「本屋さん」に関心を持っているとは、実に興味深いテーマではないか。

（「新文化」記者）

人文会会 員 名 簿

(〒113-91 東京都文京区本郷局私書函89号)

1987. 10. 現在

	社 名	担当者	〒	所 在 地	電 話	F A X
	青 木 書 店	古川 清	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481	292-0475
	大 月 書 店	原田 敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	橋本 盛作	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510	265-7767
	紀伊國屋書店	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘5-38-1	439-0125	439-1094
	勁 草 書 房	石橋 雄二	112	文京区後楽2-23-15	815-5277	814-6854
	社 会 思 想 社	渡辺 和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8105	813-9061
	春 秋 社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611	253-1384
幹 事	晶 文 社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501	255-4506
幹 事	誠 信 書 房	濱地 正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666	945-8880
幹 事	創 元 社	重光 義彦	162	新宿区山吹町77	269-1051	269-1092
	筑 摩 書 房	菊池 明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651	295-0220
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4		
				新宿東海ビル	356-1541	341-1833
会 長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	812-2111	内7955
幹 事	“	竹内 康一	“	“	811-8814	812-6958
幹 事	日 本 評 論 社	後藤 光行	170	豊島区南大塚3-10-10	987-8621	987-8590
	福 村 出 版	福村 惇一	112	文京区小石川1-3-17	813-3981	818-2786
	平 凡 社	丸山 正美	102	千代田区三番町5Kビル	265-4492	263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見2-17-1		
				法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	み す ず 書 房	相田 良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131	818-6435
幹 事	未 来 社	西谷 能英	112	文京区小石川3-7-2	814-5521	814-8600
	雄 山 閣 出 版	武 一雄	102	千代田区富士見2-6-9	262-3231	262-6938
	有 斐 閣	佐藤 進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811	262-8035
	吉 川 弘 文 館	川越 重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151	812-3544

販売企画委員会 ◎竹内 ○古川 福村 丸山 佐藤 川越

弘 報 委 員 会 ◎西谷 ○原田 橋本 渡辺 澤畑

調査・研修委員会 ◎萬洲 ○市川 石橋 岡田 武

20周年記念委員会 ◎濱地 ○佐久間 ○菊池

◎印は委員長 ○印は副委員長

法政大学出版局

ギリシアの光と神々

クレーゼイ、人類の精神史の原点にたち寄り、
新しい古代研究の成果を、その輪郭を示す
諸論考を集成する。円子修平訳／2000円

イデオロギーと想像力

G.C. カバト、多事多端な生活と時代の幻
想とイデオロギーの想像力を追って、執筆と創
造の過程に踏み込む。小筑俊介訳／2800円

フッサル現象学

アグーレ、超越論的現象学の立場から今
日の解釈と批判の主要な論点を時味しつつ
多岐にわたるフッサルの思索に統一した
展望を与える。川島・工藤・林訳／2200円

人間の進歩

プロノフスキー、人類の起源から現代文
明までの大長征を描く。その創造と進歩の
道程を、岡沢・岡沢・岡沢訳／2400円

パリの断頭台

レヴィ、フランス革命の中心に
命をかけた人々の死を、多
岐にわたる断頭台の歴史を、
岡沢・岡沢・岡沢訳／1900円

東京都千代田区富士見2 / 電話 03-237-1731

心から脳をみる

利島 保著

神経心理学への誘い 認知科学の
登場は心の科学にコペルニクスの
転回を迫った。神経心理学へのエッ
セイ風入門書。 四六判／2000円

性と愛の心理

田中敏明編著

現代社会の性をめぐる現象を多面
的に分析し、セクシュアリティの
レッスンを提供。 四六判／1800円

福村出版

東京・文京・小石川1-3/電話(03)813-3981

コンピュタの泥沼から

増山元三郎、ヒトの成長直線、外国語学習法など、推計学の
第一人者が若い人に贈る知的自己修練の実例集。 三〇〇円

メデア論

マクルーハン、テレビ、漫画、広告など、現代の多様な諸メ
デアの意味と機能を明示した大著。 栗原・河本訳。 四〇〇円

混沌からの秩序

ブリコジン／スタンジェール、宇宙と生命の秩序形成を説明
する新しい世界観。 伏見康治・伏見康・松枝秀明訳。 三〇〇円

東京文京本郷
3丁目17-15

みすず書房

NHK 日本 加藤周一 NHK取材班 その心とかたち 全10巻

十数カ国三年にわたる海外取材をも
とに、初めて地球的視野でとらえた
日本の美の歴史、いま誕生 /

第一期・5冊

- 1 はじめに形ありき
- 2 神々と仏の出会い
- 3 現世から浄土へ
- 4 水墨・天地の心象
- 5 琳派・海を渡る

続刊(6巻～10巻)・1988年3月発売予定
A4変型判・各巻136ページ ●定価各巻2,000円

平凡社 千102 東京都千代田区三番町5
振替・東京8-29639 〓03-265-0455

新刊案内

当節定時制高校事情

佐々木 賢著

(有斐閣新書) 七〇〇円

定時制高校の教師経験20数年の著者が、若者の不定型のエネルギーに、ある時は立ち往生し、また格闘する。いつもはマジメなケンさんが、一転、軽いノリで語る当節定時制事情。

高校中退

克服のためのカルテ

小林 剛著

(有斐閣新書) 七五〇円

一年に11万人を超える高校中退生——なぜ彼らは高校を去るのか。著者自身の教育の場での体験と全国からの多くのケースにもとづき、真に生徒の側に立った教育のあり方を考える。

有斐閣

東京都千代田区神田神保町2

ユルゲン・ハーバーマス著

コミュニケーション的

行為の理論

全3冊(上・中・下)
定価各4800円

平井俊彦・M.フーブリット・河上徹逸・徳水伸・脇圭平 他訳

法制化とコミュニケーション的行為
(ハーバーマス・シンポジウム) 河上徹逸・M.フーブリット編 定価2000円

未来社

東京都文京区小石川3-7
電話(814)5521振東7-87385

第8巻

(すーたお) 新刊
定価一四、〇〇〇円

第1巻 11,000円
第2巻 11,000円
第3巻 11,000円
第4巻 11,000円
第5巻 11,000円
第6巻 11,000円
第7巻 11,000円

国史大辞典

全15巻

日本最大の定本的歴史百科

絶賛刊行中

吉川弘文館

東京文京区本郷7-2/電話03-813-9151

●古風土記の全体像を描く●

入門・古風土記^上

水野 祐著

上=好評発売中 下=10月20日発売

●A5 各3200円●

●フィールドワークに必携の書●

民間信仰調査整理ハンドブック^上

圭室文雄・平野榮次 編
宮家 準・宮田 登

上=理論編(10月5日発売)

下=実際編(11月5日発売)

●四六 各2800円●

雄山閣

千代田区富士見2/振替東京3-1685

青木書店

藤原 彰編著

定価一三〇〇円

沖縄戦—国土が戦場になったとき

沖縄と本土での戦争体験の落差を埋めるために！

西島有厚著

定価二五〇〇円

切手で読む第二次世界大戦

世界各国四・五種の切手で第二次世界大戦の具体像を！

櫻本富雄著

定価二五〇〇円

満蒙開拓青少年義勇軍

棄民政策の実態を明らかにし、国家と教育の責任を問う

東京都千代田区神保町1-60

現代哲学基本論文集Ⅰ・Ⅱ

坂本大編 フレーゲ、ラッセル、タルスキ、ムーア、ライル等、今世紀前半の名論文を収める。各2200円 250

イヴ／その理念の歴史

J・A・ライリッブス／小池和子訳 フェミニズムを視野においたイヴ神話の画期的な解釈の解釈史。2700円 300

象徴と権力 儀礼の一般理論

竹沢尚一郎 フレイザー、L・フリユル、L・ストロース、V・ターナーと象徴解釈の発展をたどる。2900円 300

ヨーロッパの精神と現実

高柳先男 米ソ間の新しい展開をむかえて、ヨーロッパはどう対応するのか。危機状況の分析。2900円 300

東京文芸 後楽2-23 勁草書房 振替東京 5-175253

南京事件を 考える

洞 富雄
藤原 彰編
本多勝一

46頁・2000円

南京事件は、いまなお論争の焦点の一つとなっている。本書は、地道な取材と新史料の発掘につけてきた歴史家とジャーナリストが、南京事件の実態をさぐり、それが現代に問うかける意味を多様な視角から突明する。

大月書店 東京文芸本郷2-11-9

同じことをみずみずしい感動で言い続けたい

行動するジャーナリストとして、

反骨と反権力の姿勢をつらぬいた

青地 晨

自分史と時代を展くためのメッセージ！

青地 晨
鎌田慧解説
一八〇〇円

カメラマンの映画史

山口猛編 カメラ一途、映画づくりにかけた60年・二二〇〇円

東京・本郷 社会思想社 813-8105

目撃者の証言

E.F.ロフタス／西本武彦訳 目撃者証言の信ぴょう性をとりあげ、人間の記憶がどのくらい正確でどのくらい曖昧かを心理学的に考察する。 2800円

ブラザー・アニマル

フロイト、ザロメ、タウスクの世界

P. ローゼン／小此木啓吾訳編 知られざる天才精神分析家タウスクとその師フロイトとの葛藤を描く。 2000円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03-946-5666

漂流へ



芹沢俊介家族論集

◎芹沢俊介 今、新しい家族への旅にむかい始めた女と子供が描くシナリオとは？「方舟論」によって既成の家族論に一線を画した著者の力作。 1700円

11月刊 子どもの犯罪と死(仮)

◎山崎哲＋芹沢俊介 (予) 1700円

トランスパーソナルとは何か

◎吉福伸逸

ニューエイジは、なぜ驚りや宇宙意識を問題にするようになったのか、どう理解しているか、どう深まっていくか——様々な問いに徹底的解答。 1600円

春秋社 東京都千代田区外神田
2-18-6 ☎(03)255-9611

ユングと共時性

◎イラ・プロゴフ

河合隼雄・幹雄訳

ユングの共時性概念の思想的な位置づけ、成立過程をたどりつつ詳説する。 1400円

家族関係

あらカルテ

◎頼藤和寛

四人の子を持つ俊英の精神科医が、夫婦・親子・兄弟間の問題を軽妙に解き明す。 1200円

創元社

大阪市北区西天満1-4-2 ☎06-363-2531
東京都新宿区山吹町334-11 ☎03-269-1051

ラディカルな日本国憲法

C・ダグラス・ラミス 加地永都子訳
平和憲法が実現しようとした日本とはどんな日本だったのか？ 憲法の根源を解明するエッセーほか、政治的自己満足から目を覚まさせる。 1500円

よい医者を見分けるには

丹羽幸一 患者にとって安心できる医者とは？ どうすれば医者の能力を評価できるか？ 豊富な事例をもとに、「よい医者」を見分けるための知識とチェック・ポイントを提示。 1900円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話 (255)4501

非
売
品

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印